

使徒言行録 第15章1～21節

今日の聖書の箇所は少し前、使徒言行録14章26節以下では、喜びの報告が語られています。【そこからアンティオキアに向かって船出した。そこは、二人が今成し遂げた働きのために神の恵みに委ねられて送り出された所である。到着するとすぐに教会の人々を集めて、神が自分たちと共にいて行われたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったことを報告した。そして、しばらくの間、弟子たちと共に過ごした。】このように喜びの中にあったにもかかわらず、15章に入ると話は一転します。【ある人々がユダヤから下って来て、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と兄弟たちに教えていた。それで、パウロやバルナバとその人たちとの間に、激しい意見の対立と論争が生じた。この件について使徒や長老たちと協議するために、パウロとバルナバ、そのほか数名のものがエルサレムに上ることに決まった。】喜びだったはずの異邦人伝道は、こうして思わぬ対立を生むことになります。

ユダヤから下って来た人々はなぜ、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と告げていたのでしょうか。彼らは、救いはユダヤ人だけのものだと考えていたのでしょうか。いいえ、そうではありませんでした。彼らはなんとかして、異邦人に対して救いの道が開かれるようにと願ったのです。ユダヤ人キリスト者にとって割礼とは、神様との契約のしるしでした。創世記17章10節以下にはこう記されています。旧約聖書21ページのいちばん後ろの行になります。【あなたたち、およびあなたの後続く子孫と、わたしの間で守るべき契約はこれである。すなわち、あなたたちの男子はすべて、割礼を受ける。包皮の部分を取り取りなさい。これが、わたしとあなたたちとの間の契約のしるしとなる。いつの時代でも、あなたたちの男子はすべて、直系の子孫はもちろんのこと、家で生まれた奴隷も、外国人から買い取った奴隷でああなたの子孫でない者も皆、生まれて八日目に割礼を受けなければならない。あなたの家で生まれた奴隷も、買い取った奴隷も、必ず割礼を受けなければならない。それによって、わたしの契約はあなたの体に記されて永遠の契約となる。】ルカによる福音書2章21節には、生まれて八日目に割礼の日を迎えられたイエス様の話が記されています。イエス様御自身も割礼を受けられたのです。このようにユダヤ人にとって割礼は、神の契約に入れられるためのしるしでした。ですから、ユダヤから下って来た人々は、異邦人を救いの道から除外するのではなく、むしろ異邦人も救いにあずかってもらいたかったのが割礼を受けてほしいと願ったのです。

そしてまたエルサレム教会には複雑な事情がありました。エルサレムはユダヤ教の中心地でした。そして、ユダヤ教の中でキリスト教は異端でした。かつてパウロも、キリスト教を迫害していたほどでした。キリスト教を敵対視するユダヤ教の中心地であるエルサレムで、エルサレム教会がキリスト教の教会としてやっていくためには、なるべくユダヤ教の人たちと衝突しない方法を考えなければなりませんでした。そのために、キリスト教は決して異端ではないことを示すために、ユダヤ教と同じようにモーセの律法を忠実に守り、神の契約のしるしである割礼も受け、同じ神の約束に入れられていることを示す必要がありました。それが、ユダヤ教の中心地でエルサレム教会が生き残るための道だったのです。

では、ユダヤから下って来た人たちは、いったい何が問題だったのでしょうか。彼らは、異邦人に向かってこう言いました。神の約束に招き入れられるためには、ユダヤ人が神様

と契約を結んだように、同じように割礼を受けなければならない。ユダヤ人と同じにならなければならない。それは、ユダヤ人になれ、という命令でもありました。

はたして私たちの教会はどうでしょうか。教会で礼拝するためには、こうしなければならない。子どもは静かに座ってなければならない。礼拝堂では、物音を立ててはならない。霊とまこととを持って、真剣に礼拝を献げなければならない。きちんとした身なりで礼拝を献げなければならない。もちろん、他の人たちが礼拝するために邪魔になることは決して行ってはなりません。誰も、他の人が礼拝する権利を奪うことはできないからです。けれども、ああしなければならない、こうしてはならないということがみんなを縛ってしまっているのだとしたら、ユダヤ人と同じようにならなければ救いを受けることができないという彼らの主張と同じなのではないでしょうか。

救いを受けなければ、ユダヤ人になれ。この主張に真っ向から反対したのが、実際に異邦人伝道に携わっていたパウロとバルナバでした。彼らはこのことに決着をつけるために、エルサレム教会へ行きます。そして6節にあるように、彼らは協議するために集まってきます。そして7節の初めには『議論を重ねた後』と記されています。これがとても重要なことでした。彼らは議論を重ねたのです。どのくらい議論を重ねたのか、ここには記されていません。聖書ではたった一言で終わっていますが、議論が出尽くすほど重ねられたのではないのでしょうか。これらの議論を受けて、エルサレム教会の指導者でもあったペトロは、自分の経験をもとに11節のように結論付けるのです。「わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じことです」。使徒言行録10章でコルネリウスという異邦人に関わったペトロは「神は人を分け隔てなさらないことが、よく分かりました」と語り、その経験から「主イエスの恵みによって救われる」という結論を導き出したのです。このペトロの発言を受けて、エルサレム教会のトップだったヤコブが2つのことを述べます。それが、19節以下に記されています。一つは、神に立ち帰る異邦人を悩ませてはならないこと。ユダヤ人にならなければ救いはない、などとユダヤ人と同じになることを強要してはならないのだ、とヤコブは語るのです。そしてもう一つは、それでも律法を守ってきたユダヤ人キリスト者に配慮して、若干の条件を付けること。偶像に供えた汚れた肉を食べないこと、みだらな行いをしないこと、そして、絞め殺した動物の肉と血とを取らないこと。このわずかな条件でした。ユダヤ人キリスト者が異邦人キリスト者を受け入れるのだから、異邦人キリスト者もユダヤ人がこだわっているところを少しは認めて、譲歩する必要がある。ヤコブはそうように語るのです。

ペトロが「主イエスの恵みによって救われる」と言ったにもかかわらず、ヤコブはいくつかの付帯事項を付けました。そして、これを聞いたパウロは、自分の主張を押し通すのではなく、ヤコブの提案を受け入れるのです。

コリントの信徒への手紙一8章でパウロは、偶像に供えられた肉について語ります。偶像の存在など信じていないパウロにとっては、そもそも偶像の神など存在しないのだから、偶像に供えられた肉であろうが、天地の造り主である神様に感謝していただければよいという信仰を持っていました。けれども、偶像に供えられた肉をパウロが口にすることを見て良心の弱い人がつまずくくらいなら、決して肉を口にしないと語ります。自分の信仰理解よりも、それによって引き起こされる出来事、他の人をつまづかせるようなことをしないと

いうことが、パウロにとっての判断基準になっています。このようなパウロの思いが、ヤコブの提案を受け入れさせたのかもしれませんが。

ユダヤ人キリスト者は、自分たちが入れられている神様との恵みの約束に異邦人キリスト者たちも入るようにと願います。異邦人キリスト者は、ユダヤ人のようになるのではなく、自分たちの信仰理解のもと、自分たちのあり方でクリスチャンとして立ちたいと願います。それぞれの思いがせめぎあう中、エルサレム教会のトップであったヤコブは、対立する双方が分裂することなく、それぞれが少しずつ譲歩しながら、歩み寄る方策を考えました。それが、両者が生き残っていくための方策であり、共に生きるということでした。同じイエス・キリストを信じる者たちが、ユダヤ人であるか、異邦人であるかという違いによって互いに反目し合い、分裂し合っても何の利益にもならないのです。そうではなく、本当は、キリスト教を信じていない人たちに向けて、もっとやらなければならないことがたくさんある。ユダヤ人キリスト者も異邦人キリスト者も、互いに協力し合い、ユダヤ人にも異邦人にも救いをもたらしてくださったイエス・キリストを宣べ伝えていかなければならない。こうして彼らは、自分たちの主張だけを強く推し通すのではなく、また相手の言い分だけを一方的に受け入れるのでもなく、両者がしっかりと協議して譲れるところは譲り、譲れないところはきちんと主張して、相手側の気持ちも理解しながら、双方が歩み寄っていく。こうやってエルサレム会議は終了し、それぞれの新しい歩みが始まっていきます。使徒言行録 15 章 22 節以下には、この決定を知らせるためにパウロやバルナバと一緒にエルサレム教会から人が派遣され、決定された内容を伝えたことが記されています。そして 31 節には、アンティオキア教会の人々が、励ましに満ちた決定を知って喜んだと記されています。この決定によって、それぞれの働きが妨げられることなく、教会の本来の目的である福音宣教の業に進んでいくことができたのです。

私たち神戸西教会では、昨年から教会員以外の方々がもっとたくさんこの会堂を利用できるように、規則を整え、教会員との関わりがないグループにも教会堂を貸し出すようにしてきました。そのことで、不満を感じておられる方もいるかもしれませんが。この会堂を掃除したり、会堂を整えたりしているのは私たち神戸西教会の教会員だからです。けれども、この会堂に一人でも多くの人たちが足を踏み入れ、教会の雰囲気味わうこと。掲示物を見て関心を持つこと。まったくキリスト教に関心がない人たちが、教会に出入りする。それだけでも、とても有意義なことだと思います。パウロも、フィリピの信徒への手紙 1 章 15 節以下で、次のように語っています。新約聖書 361 ページです。【キリストを宣べ伝えるのに、ねたみと争いの念にかられてする者もいれば、善意でする者もいます。一方は、わたしが福音を弁明するために捕らわれているのを知って、愛の動機からそうするのですが、他方は、自分の利益を求めて、獄中のわたしをいっそう苦しめようという不純な動機からキリストを告げ知らせているのです。だが、それがなんであろう。口実であれ、真実であれ、とにかく、キリストが告げ知らされているのですから、わたしはそれを喜んでいきます。これからも喜びます。】

エルサレム会議でたくさんの議論を重ねたように、私たちももっとも多くの議論を重ねながら、たくさんの方々が少しでもキリストの福音に触れる機会が生まれるように、私たちも励んでいきたいと願います。お祈りしましょう。